

2024.12.15 (日)  
勝山中部中学校

# 粘り強い子どもを育てる

福井県教育総合研究所  
石川県小学校・中学校・高校  
スクールカウンセラー 藪下遊

# 最近増えている中学生や高校生の問題や不適応

- 受験期になって志望校に届かないことにパニック→不登校→安定だが…
  - ▶ やけに理想が高く、それが崩れる状況から遠ざかろうとする。
  - ▶ 一見、自信家に見えるが、実際はプライドが高くて、ダメになる現実を回避する。
- 「このクラスのルールは俺だから」、嫌なことはしない、給食で「マズそう」等
  - ▶ 物事を判断する主体は「自分」だと思い込んでいる。
- 「子どもが夜中に出歩いているので、学校で注意して」と求める母。
  - ▶ 子どもの問題を指摘できない、その解決を「外」に求める。
  - ▶ 受験期に「この子が決めたことなので…」と押し返せないケースが多くなっている。

社会の変化

子育ての側面

# 現代は「現実につづかる」ことが少ない時代

## • 世の中の価値観の変化

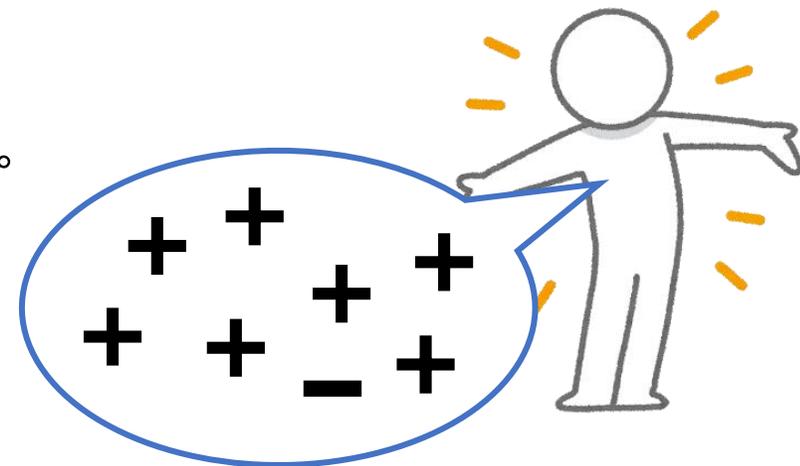
- 褒めて伸ばす→耳が痛いことは言わない、に置き換わっている。
- 我慢は良くない・自己主張が大事、という考え方。

## • 世の中が便利になったことの問題とは？

- クリスマスによる「贈与の練習」

## • 学校の変化

- 通知表の変化、比較を避けて順位を張り出さない
- 少子化による高校受験の変化、通信制高校の増加で「変化を求められない」こと
- 自己評価をさせること：社会の評価は何で決まっているか知っておこう



現実慣れしていない子どもの増加 と 子育ての変化

# 0歳～1歳の「こころの課題」



①きちんと反応・対応してもらえる

②自分の反応で不快を取り除いてもらえる

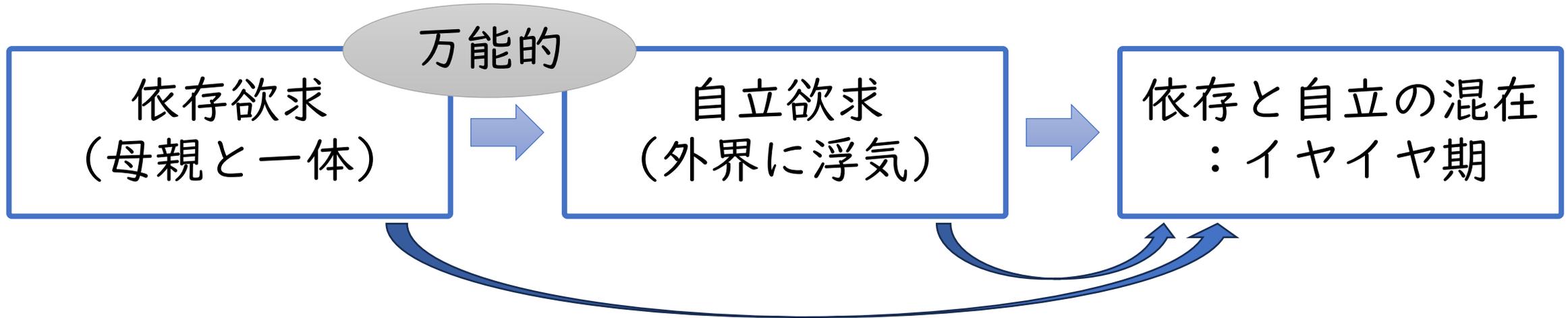
## 基本的信頼感

「この世界で生きていて良い」  
という何となくの感覚

## 万能的な有力感

自分には力があるんだという感覚  
これがあるから外の世界へ行ける  
ただし、未熟さゆえに万能感が漂う

# 1歳半過ぎから現れる「こころの課題」



外の世界と  
ぶつかることで  
錯覚から脱け出す  
【錯覚-脱錯覚】

- 親は自分にとって100%の存在ではない。  
→ だけど、まあ悪くはない。
- 自分は万能ではない、完璧ではない。  
→ そんな自分でも大切にしてもらえる。

# イヤイヤ期の関わりで大切なこと



①変えられない現実に出合うようにする

②イヤイヤ言わせつつ、**ごちゃごちゃ関わる**

- 「現実を変える子育て」から「**現実を歪めず、支える子育て**」への移行が大切。
- 現実を誤魔化・改ざんせずに、子どもに示し、支えることが大事な時期。
  - 音読カードで△を付けると泣くから、下手だけど◎を付ける。
  - いじめの調査で「うちの子が怖い思いをした！」
  - パン屋さんで「パン屋さんが怒るから止めなさい」

# 現実を歪め続けられると？



思い通りにならないことが…

A. おかしい!

B. ふつうだよ？



- 問題は 「外界はコントロールできる」 という思い込みを持つこと。
  - 学校の中で体験するちょっとした「思い通りじゃない」が不快になる。
    - ※ 多くの子どもにとって普通なことが、たまらなく不快というパラドックス。
  - 「外が悪い」というマインドが育ちやすくなってしまふ。
  - コントロール不能な出来事によってショック反応が生じやすい。

子どもの思う通りに  
外界を変えてしまう

- ダメなところを指摘しない。
- 心配や懸念を伝えない。
- 誤魔化しをスルーする。
- 精神的負担を無くそうとする。

科学技術の発展  
サービス向上

現実の壁の  
少なさ

逃げてても良いよ

比較はダメ



子どもが「耳が痛い現実」に触れる機会が減ってしまう

子どもにとって大切なのは「ネガティブな自分」を  
大切な誰かと共有し、それでも自分の存在を認められること

これがされていないと…？



【自己イメージが高い】  
プライドが高い

自己愛は強いけど  
自信が無い



【こころの奥底は脆弱】  
現実を恐れる

- 「脆弱な自分」を覆い隠すように出現。
- 都合の良い現実しか見てこなかったため、現実よりも「優れた自分」を理想として持ってしまう。
- 上下で物事を見る＝上から目線になりやすい。

- 「弱い自分」や「ダメな自分」を話題にされなくなり、支えられる体験がなくなったため、弱さを認められない。
- その結果、「弱い自分」「ダメな自分」をさらすことに、非常に強い恥・屈辱を感じてしまう。
- 相談することができない。

# 具体的な不適応・問題の現れ方

- テスト場面や受験など、苦手な状況・現実に直面する場면을回避・逃避→不登校
- ちゃんとしてないのに委員長に立候補：プライドの高さ、「上」になりたがる。
- 頭が良くても成績が下がる：わからない問題の先が白紙。間違えた問題との向き合い。
- 外罰的な言動：ハサミを返すときに「ありがとうって言おうね」と言われた子ども。
- 周囲を見下すような言動・態度、他者を煽る・チート・論破・マウントなどのマインド。
- 「自分が上」と感じるようなゲームにはまり込んでしまう。

どう関わってあげればいいのか？

# 現代の子どもたちに必要な体験や関わり

- 基本方針は 「現実を歪めないように伝えつつ、その時の苦しさを共有する」 ということ（現実を見せない、ではない！）。

➤ 昔なら学校や世間がやってくれていたことを、家庭がやらねばならなくなってきた…

- 具体的に必要なことは？

- ① 現実を歪めずに伝える力：未来を見据えた関わり、問題を見逃さない力。
- ② 苦しさを表現される工夫：間違えることの重要性を伝える、不完全さを見せる等。
- ③ 学校との連携：学校が現実を伝え、親が子どもを支える…などの協力プレイが大切。

- 親の心構えとして大切なこと。

- 「見守る優しさ」が優しさとして伝わるのは、子どもの内面に「踏み込む力」がある場合限定。
- 見守るか踏み込むか迷ったときには、基本的に「踏み込む」ことを勧めます。

## まとめ・おわりに

- 中学校では、これからどんどん「現実の壁」に出会うことが増えるはず。
  - 必要なのは、その現実に向き合う子どもを支えることであって、現実を変えたり歪めたりすることではない。
  - 学校もその手伝いができるので、連携・協力をしていくと家庭が楽になる。
- 適切な対応によって子どもの成熟を促していきましょう。

ご清聴  
ありがとうございました

